

発刊にあたって

近年わが国や世界において、新たな感染症が問題とならない年はないほど、感染症が社会的にも大きな問題となっている。厚生労働省の人口動態調査によると2012年にはわが国における死因のうち、肺炎が悪性新生物疾患、心疾患につぐ第3位と、死因に占める感染症の割合も増加しており、感染症に対する対応の重要性が増してきている。

感染症に対する治療薬としてこれまでに多くの抗菌薬が開発され、臨床に応用され、その有用性は明らかである。一方、多剤耐性菌の増加などから新規の抗菌薬開発の必要性が叫ばれている。しかし、新たな抗菌薬の開発には多大な費用と時間を必要とし、現状では困難な状況にある。このような状況下では、現存の抗菌薬をいかに適正に使用するかが重要な課題となっている。

これまでに抗菌薬の選び方・使い方を扱った書物は多数あるが、初学者でも読み切ることができる厚さで、幅広い視点から、臨床現場で必須な実践的知識を入れて、常に携帯できるようなサイズおよび内容のコンパクトな書籍は必ずしも多くはなかった。そこで図表などを多く取り入れ、研修医、プライマリ・ケア医、薬剤師、各種医療従事者が日常診療においてポケットに携帯し手軽に見られ、使いやすい書物をと、本書を企画した。本書の構成は、主に、知っておきたい病原細菌の基礎知識、各抗菌薬の特徴、感染部位別の抗菌薬の使い方となっており、感染症・化学療法分野の第一線の先生方に執筆をいただいた。本書が、わかりやすく、使いやすいハンドブックになっていると確信している。

2013年8月

東京女子医科大学感染対策部感染症科
教授 戸塚 恭一